大学生の中途退学に関する心理的要因の文献研究

小　正　浩　徳

1．問題と目的

文部科学省が2014年に公表した，2012年度の大学等の学生の中途退学者（以下，中退者）の総数は79,311人であり，これは全学生数の2.65％にあたる。文部科学省が2007年度に調査した結果では2.41％であり，中退者の数は横ばいから緩やかな上昇傾向にあることが推察される。大学などの高等教育界にとって2018年度は「2018年問題」といわれている。これは，18歳人口が一気に減少するタイミングであり，学生獲得に向けさらなる検討が必要となる転換点でもある。このような状況から，中退者がある一定数存在する大学教育において，何らかの対策を講じる必要があることは言うまでもない。本稿では，この中退に対し大学教育の中でどのような対策を講じることができるのかを考えるために，先行する研究の検討を行う。

中退の理由について，文部科学省（2014）は経済的理由を最も大きな要因として挙げている。その割合は中退者79,311人に対し，16,181人（20.4％）である。次いで転学を理由とするものが12,240人（14.5％），学業不振を理由とするものが11,503人（14.5％），就職を理由とするものが10,627人（13.4％），病気・怪我・死亡を理由とするものが4,616人（5.8％），学校生活不適応を理由とするものが3,461人（4.4％）と続く。こうした状況に対して，最も大きな中退の要因となる経済的理由にむけた解決策として文部科学省は奨学金・授業料の減免等の拡充のために国の予算を投入していこうとするものの，なお不十分な可能性があると考えている。龍谷大学（以下，本学）でもこうした経済的理由への対応として，様々な奨学金制度を学生に向け広報している。

しかし経済的理由のほかにも中退の理由はさまざまである。文部科学省の報告では学業不振について，高校と大学における教育のギャップに学生が適応で

きていない可能性を指摘している。そのうえで，各大学における新入生を対象とする総合的教育プログラム（初年次教育）を推進することで対応しようとしていることを述べている。本学文学部でも，入学後のオリエンテーションをはじめ種々の初年次教育を実際に行っている。また，他大学の取り組みとして，吉田（2017）は東京未来大学の取り組みを紹介するなかで，「自分の存在を認めてくれる人がいるという感覚の醸成が，大学に留まる意味を見出すことになるだろう」と初年次教育の意義を述べている。杉本（2017）は一般論として，「大学コミュニティの一員だと実感できている学生のほうが高い学修成果を上げ，満足度が高い」と述べている。このように大学に適応するということには，心理的要因が含まれていることが考えられる。そこで，大学に適応する心理的要因や，中退にいたるまでの心理的要因が明らかにされればそのことに対する予防や対応策も検討できるだろう。

それゆえ，本稿においては大学を中退する心理的要因について検討するために，「適応」をキーワードとして先行する研究を概観し，そこで明らかとなった知見をもとに現在の大学生が中退を意図する要因を探り，現段階で考えられる中退への予防・対応策について整理してみたい。

2．方法

大学生の中退の心理的要因に関する先行研究を概観するために，次の方法を用いて先行研究の収集を行った。

① NII 学術情報ナビゲータ（以下, Cinii）を用いて，本文内に「大学生　退学　心理」を含む論文を検索した。またさらに「大学生　退学　適応」を含む論文を検索した。今回中退に関する心理的要因を探るために「適応」という言葉を用いたのは，「学校生活不適応」が中退の理由として明らかにされており，この「不適応」は心理的要因の一つとして考えられたためである。

② 論文検索の時間的範囲を2009年から2018年までの10年間とした。これはやみくもに範囲を広げるのではなく，現代の大学生の心理的要因を考えるためにまず10年を一区切りにして考えることとした。

③ 検索された論文の中で，論文タイトルにナンバリングが施されているなど継続的な研究を行っていると考えられた論文については，Cinii での検索結果に掲載されていなくても，当該の論文の文献リストをもとに継続している論文を探した。そのうえで本稿における調査の対象とした。

④ 上記方法に加えて，日本心理学会による雑誌「心理学研究」，日本教育心理学会による雑誌「教育心理学研究」，日本発達心理学会による雑誌「発達心理学研究」でも同様に検索を行った。

なお，③・④による検索時期は2018年９月である。

⑤ 対象となった論文について，その研究の（１）調査対象，（２）調査方法，（３）得られた知見の３点を表にまとめ整理した。

３．結果

「２．方法」に示した手順で収集された論文は「大学生　退学　心理」においては７本，「大学生　退学　適応」においては11本であった。このうち５本は両方の検索結果に掲載されていた。加えて継続的な研究を行っていると考えられた論文について，その文献リストを用いて収集された論文は３本であった。また，「教育心理学研究」にて同様に検索をし，うち１本が該当した。これら計17本の論文のうち，学会発表用抄録を除いたうえで，本稿の目的に合致すると考えられた論文14本を検討のために用いた。

この14本の論文について発表年が古いものから順に並べ，（１）調査対象，（２）調査方法，（３）得られた知見をまとめ表１に示す。

14本の論文のうち，文献１，２，３，文献５，６，８，10，文献12，13はそれぞれ連続する研究であった。この表１をもとに，（１）調査対象，（２）調査方法，（３）得られた知見の順に検討を行った。以下にその結果を記す。

（１）調査対象について

教員を調査対象とした文献11を除き，13本の文献が大学生を調査対象としていた。

性別については，調査を行った大学が女子大学であれば女子のみが対象となり，共学であれば男女のデータとなっていた。

文献２，３，５，６，10では大学１年生から４年生，文献８では大学１年生から３年生であった。文献１，７は対象となる学年が不明であった。が，文献１については連続する研究となる文献２の記載から大学１年生から４年生と推測される。また文献７は平均年齢ならびにSDから大学１，２年生が多かったのではないかと推測される。文献4,9,12,13では大学１年生が対象であった。

なお，文献9,10,12では複数の大学に所属する学生を対象としていた。

表1 本研究の対象となった文献リスト

文献No.	筆頭著者	発表年	調査年	対象	性別	人数	方法	質問紙の内容ならびに分析対象項目	得られた知見
1	松井洋	2010	2009	大学生(年次不明)	女性	計184名	質問紙	大学適応，勉学に対する態度，個人特性に関する50項目	退学への思いは入学目的と友人関係が影響。不適応感は授業理解，入学目的，友人関係が影響。大学への満足感は入学目的，勉強意欲，友人関係，授業理解が影響。
2	中村真	2011	2009	大学1年生から4年生	女性	計184名(1年生89名，2年生67名，3年生20名，4年生7名)	質問紙	大学適応，勉学に対する態度，個人特性に関する50項目と大学入学動機など6項目	授業理解のみ高い，入学目的はしっかりとしていたが授業理解と友人関係は低い，友人関係は高いが入学目的と授業理解は低いと不適応を感じる。しかしこれら3つのうち2つが高いと満足している様子がうかがえる。
3	松井洋	2012	2009，2010	大学1年生から4年生	女性	計350名(2009年調査時184名，2010年調査時167名)(1年生64.9%，2年生23.6%，3年生，8.9%，4年生2.6%)	質問紙	質問紙としては87項目だったが，そのうち大学適応，勉学に対する態度，個人特性に関する計50項目を分析対象とした	退学志向は，入学目的が明確でない，友人関係悪い，授業理解低いほうが強い。これら3つと個人特性が退学志向を説明している。授業満足は授業理解高く，入学目的明確，友人関係良い，勉強意欲好き，個人特性積極的であると高い。授業満足は友人関係，入学目的，勉強意欲で説明される。不適応では授業理解低く，入学目的明確でない，友人関係悪い，勉強意欲好きではない，個人特性消極的であると高い。不適応は友人関係，授業理解で説明される。退学志向は授業理解，入学目的，友人関係のうち2要因が悪いと強まる。授業満足には授業理解，友人関係，入学目的の2要因が高いと高まる。大学満足は入学目的，友人関係の要因の高さが影響を与える。不適応では，授業理解が悪いことが影響を与える。
4	野波侑里	2012	2011	大学1年生	男女	KOM前(SS719名，SE713名，大学生活(姿勢)716名，大学生活(実際)691名)KOM後(SS686名，SE696名，大学生活(姿勢)672名)。7月末(SS673名，SE673名，大学生活(姿勢)673名，大学生活(実際)673名)	質問紙	ソーシャルスキル(SS)尺度(Kiss-18(青年版)(菊池，2000))，セルフエスティーム尺度(SE)(菅，1984)，学校に適応したい意識に関する尺度(大学生活(姿勢)，大学生活(実際))(新垣,2010)	KOM前後ではSS，SEの得点は上がる。7末では下がっている。KOM前と7末では全項目下がる。ただし学部を比べると総合文化学部と現代社会学部では下がるが，メディア・芸術学部は変化ない。

5	中村真	2013	2012	大学1年生から4年生	男女	計574名(男性248名，女性326名；1年生328名，2年生142名，3年生72名，4年生32名)	質問紙	友人関係，授業理解の困難さ，入学目的の明確さ，教員への好感，大学の施設・設備に関する50項目(松井ら(2010)を参考作成)，大学への帰属意識26項目(高木(2003)，越(2007)，本多・井上(2005)，野寺・中村(2011)を参考作成)，大学満足感不適応14項目(松井ら(2010)を参考作成)	大学不適応には，授業理解の困難さ，入学目的の明確さで説明できる。加えて友人関係と入学目的の明確さは大学への愛着を説明でき，大学の愛着は大学不適応を説明する。就学意欲は授業理解の困難さ友人関係教員への好感，施設・設備充実入学目的が影響する。
6	中村真	2014	2013	大学1年生から4年生	男女	計540名(男性205名，女性203名；1年生302名，2年生181名，3年生40名，4年生17名)	質問紙	授業理解の困難さ，入学目的の明確さ，大学への帰属意識，大学不適応，友人関係満足度に関する21項目(中村・松田(2013)を基に作成)，改訂版友人関係機能尺度(丹野(2008))	大学不適応には入学目的の明確さと授業理解の困難さが直接影響を与え，友人関係の満足度は弱いながらも影響を与えている。大学への愛着も影響を与えており，その愛着には友人関係の満足度と入学目的の明確さが影響を与える。男子学生では，不適応感に入学目的の明確さと授業理解の困難さが影響を与えている。愛着も影響を与えており，友人関係の満足度は愛着を媒介して不適応に影響を与える。女子学生では愛着と授業理解の困難さが直接影響を与える。友人関係の満足度と入学目的の明確さは愛着を媒介して間接的に影響を与える。友人関係の満足度には男女ともに安心して気楽に付き合える関係が影響を与える。さらに男子では長期にわたる関係の継続が見込めること，女子では困ったときに助け合える関係にある友人がいることが影響を与える。
7	西田斉二	2014	2013，2014	大学生(学年不明，平均年齢19.49歳，SD0.50)	男女	計122名(男性55名，女性67名)	質問紙	モチベーション・適応アンケート(株式会社MARTONE(2009)を参考に作成された35項目)による学業および大学生活適応尺度の作成	5因子が見いだされた。一つ目は「勉強を通じて，能力，人間的な成長の実感がある」「勉強を通じえて感動する機会がある」といった項目による感情・心理因子。二つ目は「勉強や授業において自分の考えを積極的に表現できる」「課題，目標を自分で立てることができる」といった項目による積極性因子。三つ目は「大学での勉強は自分に合っていると思う」「自分の考え方や望む生き方に適した勉強だ」といった項目による適合感因子。四つ目は「勉強で困った時には相談できる人がいる」「大学でのコミュニケーションは良い」といった他者性因子。五つ目は「感情的にならず目的を達成できる」「教員から指示・指導がなくても勉強を進めることができる」といった自己対処因子。計５つの因子で構成された。

文献No.	筆頭著者	発表年	調査年	対象	性別	人数	方法	質問紙の内容ならびに分析対象項目	得られた知見
8	中村真	2015	2014	大学生(心理学系学科)1年生から3年生	男女	計212名(男性109名，女性103名；1年生78名，2年生77名，3年生57名)	質問紙	授業理解の困難さ，入学目的の明確さ，友人関係の良好さ，大学への愛着(帰属意識)，大学不適応感に関する29項目，出席率，GPA	大学への愛着の低さ，授業理解の困難さが大学不適応感の低さに影響。入学目的の明確さは男子において愛着へ強く影響。女子では弱い影響。大学不適応感は出席率に負の影響。出席率はGPAに正の影響。男子では不適応感はGPAに直接影響を与える。授業理解の困難さは弱いながらも影響を与えている。女子では大学不適応感が直接GPAに影響を与えることは無いが，授業理解の困難さがGPAに直接影響を与える。
9	千島雄太	2015	2013	国立系大学3校，私立大学1校の大学1年生(すべて文系学部)	男女	計316名(男性115名，女性201名)	質問紙	大学生活に関する期待25項目(予備調査を基に筆者が作成)，現実の大学生活25項目(大学生活に関する期待と対応)，大学環境への適応感22項目(大久保・青柳(2003)から抜粋利用)，アパシー傾向に関する7項目(鉄島(1993)から抜粋利用)	大学1年生は，時間的ゆとり，友人関係，行事，学業のすべてにおいて期待を強く持っている。期待していたよりもゆとりのある生活を送っているときにアパシー傾向が強まる。友人関係の期待が低く期待以上の友人関係を築けた場合アパシー傾向が強まる。しかしその数値でみるとアパシー傾向は弱いものとされている。友人関係が充実しているとアパシー傾向は抑制される。行事を体験することが適応感を高める。現在の学業の取り組みが大学適応に影響を与える。
10	中村真	2016	2013，2014	大学2校の1年生～4年生	男女	計596名(男性230名，女性366名；1年生317名，2年生179名，3年生87名，4年生13名)	質問紙	大学帰属意識，大学満足感・不適応感に関する39項目(中村・松田(2013))	大学帰属意識4つの組み合わせから7つのパターンを見出す。大学帰属意識全般が高い群は満足度・就学意欲が高く不適応は低い。帰属意識全般が低いまたは規範・世間体因子のみ高くあとは低い群は満足度が低く不適応感が高い。
11	松髙由佳	2016	2015	私立大学教員	不明	計67名	質問紙	不登校になり始めた時期，不登校背景，不登校学生の転帰などを尋ねる質問	不本意入学の学生が不登校になるのは1年生。学習意欲の低下では1年生と3年生に不登校が始まる傾向。不本意入学の背景を持つ学生の転帰は不登校・休学退学などの大学不適応の割合が多い。1年生で不登校となった場合，不適応となるケースが高い。
12	金子千香	2017	2015	大学2校の1年生(ともに理学療法学科)	男女	A大学88名(男性44名，女性44名)，B大学96名(男性47名，女性49名)	質問紙	大学生活不安尺度(CLAS)30項目(日常生活不安，評価不安，大学不適応感の下位尺度で構成される)	Aは偏差値54，Bは偏差値59。AはBよりも日常生活不安，評価不安が高い。不適応感には差がない。Aは退学率5.5%，Bは退学率1.5%。

13	金子千香	2017	2015	同一大学の理学療法学科と自然環境学科に所属する1年生	男女	理学療法学科88名（男性42名，女性46名）自然環境学科109名（男性89名，女性20名）	質問紙	大学生活不安尺度(CLAS)30項目（日常生活不安，評価不安，大学不適応感の下位尺度で構成される）	理学療法学科と自然環境学科では大学不適応感のみ差がでた。理学療法学科のほうが自然環境学科よりも不適応感を感じていない。
14	坂田浩之	2018	2008～2015	私立大学1年生	女性	473名（うち退学群19名，非退学群372名を調査対象）	質問紙	大学生活充実度尺度21項目(SoULS21，奥田ら(2010))（大学へのコミットメント，交友満足，学業満足，不安のなさの下位尺度で構成される）	退学者は入学時点(4月)では非退学者よりも交友関係への満足度は高い。しかし秋(11月)の時点で退学者の満足度は非退学者よりも低くなる。退学者は大学へのコミットメントが6月の段階で下降，11月の時点で非退学者よりも低くなる。退学者も非退学者も学業満足は入学時よりも11月のほうが低い。また不安も4，6月よりも11月のほうが高くなる。

（2）調査方法について

すべての文献において，質問紙法による調査を行っていた。質問紙の作成方法は，既存の尺度をそのまま用いたもの（文献４，10，12，13，14），既存の尺度から一部引用や語句の修正等を行い作成されたもの（文献３，４，５，６，７，９），調査者が質問を作成したもの（文献１，２，11），予備調査をもとに質問を作成したもの（文献９）であった。

（3）得られた知見について

1）質問紙作成ならびに調査における因子分析の結果から

大学への適応ならびに中退への意識について，文献11を除いた調査結果からは次のような項目が因子とされた。

「大学満足」「授業満足」「友人適応」「個人特性」「授業理解」「相談要求・希求」「大学不適応」「入学目的」「勉強意欲」（文献１，２，３），「ソーシャルスキル」「自尊心」「大学生活（姿勢）」「大学生活（実際）」（文献４），「大学満足」「就学意欲」「大学不適応感」「友人関係の良好さ・満足度」「教員への好感」「施設設備充実」「授業の難しさ・理解の困難さ」「入学目的のあいまいさ・明確さ」「大学への愛着」「同一視・内在化」「ブランド」「規範・世間体」（文献５，６，８，10），「感情・心理」「積極性」「適合感」「他者性」「自己対処」（文献7），「時間的ゆとり」「友人関係」「行事」「学業」「大学環境への適応感」「アパシー」（文献９），「日常生活不安」「評価不安」「不適応感」（文献12,13），「大学へのコミットメント」「交友満足」「学業満足」「不安のなさ」（文献14）である。

その他客観的指標として，調査対象となった学生の「GPA」「出席率」を用いていたものや（文献

8），受験業界が示す大学の偏差値を用いているものもあった（文献12)。

文献11では，「不登校になり始めた時期」「不登校背景」「不登校学生の転帰」について尋ねていた。

2）項目間の関係性に関する検討から

①「退学」に関して

「退学」を志向するようになる要因は複数みられた。その要因とは入学目的，友人関係，授業理解であり，これら3つの要因が影響を与える。具体的には入学目的が明確でないこと，友人関係のとりにくさ，授業理解が低いことが退学を志向することに影響を与えている。この3要因のうち，2要因が低いと学生は退学を志向する思いを強める（文献1，2，3)。

退学者と非退学者との比較から，退学者は入学当初から友人関係がとりにくいというわけではなかった。むしろ非退学者よりも入学時点で交友関係の満足度は退学者の方が高い。しかし，秋ごろになると交友関係の満足度は逆転し，非退学者の方が退学者よりもその満足度は高い。また，大学へのコミットメントについても秋ごろになると退学者は非退学者よりも，その思いは低くなっている。退学者と非退学者ともに共通する事項は，学業への満足度は入学時よりも秋ごろのほうが低いこと，不安感は入学時よりも秋ごろのほうが増すことであった（文献14)。

学力として考えた時，同一分野を学ぶ学科であっても，その大学の偏差値が低いほうが高いほうよりも日常生活不安や評価不安が高い。一方，大学への不適応感には差がない。このような状況の中で，退学率は偏差値の低いほうが5.5%であり高いほうの1.5%よりも4ポイント上回っている（文献12)。

②　大学への不適応感に関して

大学への不適応感については，授業理解，入学目的，友人関係で説明できる（文献1，2，3)。詳細にみていくと，入学目的は不適応感に直接影響を与えており，友人関係と入学目的は大学への愛着に影響を与え，この愛着が不適応感に影響を与えている（文献5，6，8）ことから，友人関係は直接的に大学への不適応感に影響を与えているとはいいがたい。さらに性別で考えると，男子学生，女子学生ともに大学への愛着と授業理解の困難さが不適応感に直接影響を与えている。しかし，男子学生では入学目的が直接的に不適応感に影響を与えているものの，女子学生では入学目的は大学への愛着を媒介として不適応感

に影響を与えているという間接的なものであった（文献６）。さらに，男子学生では入学目的の明確さが大学への愛着に強く影響を与えるが，女子学生では弱い影響にとどまる（文献８）。

不適応感と出席率，GPA との関係では，不適応感が出席率に負の影響を与え，出席率は GPA に正の影響を与える。さらに男女別でみれば，男子学生の不適応感は GPA に直接影響を与えており，女子学生では授業理解の困難さが GPA に直接影響を与えていた（文献８）。

なお，資格取得を目指すコースとそうではないコースでは，資格取得を目指すコースのほうが，そうではないコースと比べて大学への不適応感を感じていない（文献13）。

このような不適応感に対して，大学への帰属意識が抑止的に働いている可能性が考えられることから，帰属意識の観点から不適応感との関係を調べたところ次のようなことが明らかとなった（文献10）。大学への帰属意識を，「愛着」（在籍する大学を気に入っている等），「同一視・内在化」（在籍する大学の悪口を聞くと，心中穏やかでいられない等），「ブランド」（在籍する大学は，世間一般の評価は高いほうだと思う等），「規範・世間体」（在籍する大学をやめたら，家族や親せきに会わせる顔がない等）という４つの因子で構成するものとした。そのうえで，この４つの因子の平均得点の組み合わせから規範・世間体得点が高く残り３つの因子の得点が低い群と，４つの因子の得点がすべて低い群では，不適応が高かった。

大学に対する入学前の期待と入学後の実際を比較すると，期待していたよりもゆとりのある大学生活を実際に送ることになるとアパシー傾向が強まり，友人関係の充実はアパシー傾向を抑制していた（文献９）。

３）教員の印象に関する検討から

不登校大学生への直接対応などをした教員による体験をアンケート調査により分析したところ，次のようなことが明らかになった（文献11）。

大学への不登校が始まるのは，１年生と３年生に分けることができる。１年生の不登校は不本意入学生に見られる。また，１年生と３年生の中で学習意欲の低下を示すと不登校になっていることが示唆された。さらに，不本意入学生が不登校となった場合，その後の転帰では大学適応の回復は見込みにくいことがわかった。

4）大学への適応を促進する取り組みに関して

大学入学にあたり，新入生へのオリエンテーションの影響を検討したところ，以下のようなことがわかった（文献 4）。ただし，この結果に関しては統計学的検定を行っていないため，その得点差が有意かどうかまではわからない。

入学直後すぐに自己理解，コミュニケーションスキルの向上や仲間関係を作り上げるようなオリエンテーションを行ったところ，ソーシャルスキル，自尊心，大学生活に自ら取り組もうとする姿勢はオリエンテーション前よりオリエンテーション後の得点が高まったように見える。このうち，ソーシャルスキルと自尊心は 1 年生の春学期末時点でオリエンテーション後よりも得点は下がるが，オリエンテーション前と比べるとやや高いように見える。大学生活へ自ら取り組もうとする姿勢に関しては，1 年生の春学期末時点で，オリエンテーション前よりも下がっているように見える。

今回収集された文献の整理を通して，大学生の中退に関する心理的要因について，以下に文章化を試みることとする。

大学教員の実感として，新入生の中には不本意入学や学習意欲の低下などにより大学へ登校しづらい状況となる者がある。このような状況となった学生は大学へ復帰しづらくなり，大学不適応さらには中退へと進むことが考えられる。

こうしたことから新入生への取り組みが重要となるが，大学への不適応を考えると，大学への帰属意識やコミットメントと授業理解がポイントとなる。帰属意識には，「愛着」「同一視・内在化」，「ブランド」，「規範・世間体」といった要素があり，これらすべて低いまたは，「規範・世間体」のみが非常に高いと学生は不適応感を抱く。とくに「愛着」には入学目的が影響を与えているが，男子学生はこの入学目的の明確さが不適応感に影響を与える。つまり，入学目的が明確ではない，あいまいであると不適応感を高める。女子学生では，入学目的が愛着に影響を与え，それが結果的に不適応感につながっている。このように男女間で違いがある。こうした男女の違いは GPA でも見られる。すなわち，男子学生では不適応感が直接 GPA に影響を与えるが，女子学生では授業理解の困難さが GPA に影響を与えている。こうした差については，性差のほかにも，入学にあたり資格取得を目指すかどうかや入学時点での学力差なども要素になりえる。

さらに入学前の期待と，実際の学生生活のギャップが不適応感に影響を与えていることが考えられる。つまり，入学前に期待していたよりも入学後の大学

生活が思いのほか時間にゆとりがありすぎる状況になると，アパシー傾向が強まってしまう。こうしたアパシー傾向を抑制するのは友人関係の充実である。

不適応感が高まった先には，中退するということが考えられる。退学を学生が志向するようになる要因には，入学目的の不明確さ，友人関係のとりにくさ，授業理解の困難さがある。この3要因のうち2つがより強まると，学生は退学を志向するようになる。実際に退学者は，入学当時は退学しなかった学生と比べて交友関係に満足しているものの，学生生活を送るにつれて交友関係の満足度は下がり，それに呼応するかの如く，大学へコミットメントする気持ちも下がっていく。

このような状況への対応策として，入学時点すぐのオリエンテーションが考えられる。ただし，このオリエンテーションについては，その効果は期待されるものの，実際に有効かどうかはさらなる検討が必要である。

4．考察

「3. 結果」を踏まえて，学生の大学への「適応」とはどういうことか，また現段階で考えられる中退への予防・対応策について整理，検討してみたい。

（1）「適応」について

今回収集された文献において，中退を考えるための要因として検討されていたキーワードは「適応」であった。大学生の「適応」に関する因子として，以下のものが挙げられていた。それは，「大学満足」「授業満足」「友人適応」「個人特性」「授業理解」「相談要求・希求」「大学不適応」「入学目的」「勉強意欲」（文献1，2，3），「ソーシャルスキル」「自尊心」「大学生活（姿勢）」「大学生活（実際）」（文献4），「大学満足」「就学意欲」「大学不適応感」「友人関係の良好さ・満足度」「教員への好感」「施設設備充実」「授業の難しさ・理解の困難さ」「入学目的のあいまいさ・明確さ」「大学への愛着」「同一視・内在化」「ブランド」「規範・世間体」（文献5，6，8，10），「感情・心理」「積極性」「適合感」「他者性」「自己対処」（文献7），「時間的ゆとり」「友人関係」「行事」「学業」「大学環境への適応感」「アパシー」（文献9），「日常生活不安」「評価不安」「不適応感」（文献12,13），「大学へのコミットメント」「交友満足」「学業満足」「不安のなさ」（文献14）であった。

これらの因子について，その因子を構成する質問内容をもとに，同じ意味をなすと考えられるものをグループ化した。その結果，以下に示す五つのグループに分けることができた。

まず一つ目は，大学そのものに対する思いについて尋ねた質問・因子群である。これは，「入学目的」（文献１，２，３），「入学目的のあいまいさ・明確さ」「大学への愛着」「施設設備充実」「同一視・内在化」「ブランド」「規範・世間体」（文献５，６，８，10），「大学へのコミットメント」（文献14）が集められた。これらは，中村ら（2016）が言うところの大学への帰属意識が集まったものと考えられる。

二つ目は大学生活・日常生活に対する思いについて尋ねた質問・因子群である。これは，「大学満足」「大学不適応」（文献１，２，３），「大学満足」「大学不適応感」（文献５，６，８，10），「時間的ゆとり」「行事」「大学環境への適応感」「アパシー」（文献９），「日常生活不安」「不適応感」（文献12,13），「不安のなさ」（文献14）である。これらは，大学生活や日常生活を送るうえで学生が感じている適応感，不適応感が集まったものと考えらえる。

三つ目は，対人関係に対する思いについて尋ねた質問・因子群である。これは，「友人適応」「相談要求・希求」（文献１，２，３），「大学生活（姿勢）」「大学生活（実際）」（文献４），「友人関係の良好さ・満足度」「教員への好感」（文献５，６，８，10），「他者性」（文献７），「友人関係」（文献９），「交友満足」（文献14）である。これらは，大学における友人や教員との関係に対する満足度や期待に関するものが集まったと考えられる。

四つ目は，学業に対する思いについて尋ねた質問・因子群である。これは，「授業満足」「授業理解」「勉強意欲」（文献１，２，３），「大学生活（姿勢）」「大学生活（実際）」（文献４）[註]，「就学意欲」「授業の難しさ・理解の困難さ」（文献５，６，８，10），「感情・心理」「積極性」「適合感」（文献７），「学業」（文献９），「評価不安」（文献12,13），「学業満足」（文献14）である。これらは，大学での勉強の取り組む意欲や，授業への満足度・理解度，成績評価への不安に関するものが集まったと考えられる。

五つ目は，学生の内面に関するものについて尋ねた質問・因子群である。これは，「個人特性」（文献１，２，３），「ソーシャルスキル」「自尊心」（文献４），「自己対処」（文献７）である。これらは，学生自身の性格特性に関するものが集まったと考えられる。

このように，学生の大学への「適応」ということについては，学生自身が日々生活を送っているなかで感じている大学生活・日常生活での様々な思いのなかにみることができると考えられる。千島・水野（2015）が指摘するように，学生は，これまで過ごしてきた高校などでの生活環境から大学という新しい環

境に適応することを求められる。大学へ適応するにあたりポイントとなるのが，入学前にその大学についてどのように考えていたかということである。入学前の期待と入学後実際に大学生活を送ってみてどうかということであり，このギャップが大きければ大きいほど大学への不適応感は増すものと思われる。

こうした不適応感を検討するための項目として，「大学生活」について学生がどのように感じているかを入学前の思いと入学後の思いを明らかにしたうえで，入学後に大学生活への不満を感じている群について，大学への「帰属意識」，「対人関係」，「学業」という点から学生の不満や困難さについて明らかにできるような調査用紙を作成することができれば，支援の手がかりになると考えられる。

（2）今回の文献研究から考えられた学生支援とは

今回の文献研究から，入学前の大学生活への期待と，入学後の実際に大学生活を送る中で「帰属意識」，「対人関係」，「学業」を学生がどう感じるかにより，大学への不適応感が増減し，中退を志向するかどうかが決まることが示唆された。こうした大学への不適応感を強く感じている者は，GPA からも推測できると考えられる。

これらの点から，特に新入生へむけた学生支援について，検討を行う。

「帰属意識」，「対人関係」，「学業」の 3 要因に対して，まず大学組織として対応可能な点について検討する。まず「帰属意識」に関して，この「帰属意識」を高めるような取り組みを実施することが必要であろう。これは，学生が入学する大学で学生生活を送りたい，学びたいと強く思えるようになるということである。例えば，オープンキャンパスでの模擬講義やキャンパスツアー，学生による大学生活の紹介などは入学前の時点で大学への帰属意識を高める可能性があると考えらえる。ただし，同時にこれは入学前の期待を大きく上昇させてしまい，結果入学後のギャップを強く生み出してしまう可能性も考えられるため，大学を過度に良くアピールするのではなくありのままの姿を見せられるような配慮も必要になるのではないだろうか。

入学後の「帰属意識」については，新入生にとってその大学に対する入学目的や志望順位を踏まえた対応を考える必要があると思われる。例えば，本学文学部においては入学式後のオリエンテーション週間において，宿泊を伴う研修を行っている。また，文献 4 に見られるようなキックオフミーティングも同様のものであるだろう。こうした取り組みは，学生間の友人関係を構築すること

に役立っていることが考えられ，「対人関係」に向けた対応策としての側面もあるだろう。一方で，一時的に学生の気持ちを高める効果があるようだが，時間が経過するにつれ効果が薄まることが考えられる。そこで，こうした取り組みで得られた効果を持続させるような取り組みが重要となる。持続させる可能性の一つとして東北福祉大学における初年次教育でのリエゾンゼミを取り上げる。このリエゾンゼミでは，ゼミ担任，副担任，ピアメンターという手厚いサポート体制を組むことによって，初年次における中退率が減少している（杉本，2017）。このことから，入学時点で研修によって得られた効果をゼミでのサポート体制を組むことで持続できるのではないだろうか。もちろん持続させるような取り組みについては，実践研究などを行い確かめる必要がある。

「学業」に関して，大学組織としてはFD活動や講義に対するアンケート調査等から講義の工夫と改善がまず考えられる。あわせて，新入生に対して大学で学ぶ意義や学び方といった高校までの学び方から，大学での学び方へとブラッシュアップさせる取り組みも必要であろう。吉田（2017）による東京未来大学での取り組みの報告によると，AO入試での入学者に対し，入学前教育としてノートテイクの方法を教え，読解用の文章を要約して提出させること，補習教材のｅラーニングなども用意するなどを行っているという。こうした取り組みにより入学後の大学での学びに適応を早めることができれば，新入生の「学業」に関する適応感を高められるものと考えられる。

こうした大学全体としての取り組みでは，学生への個別対応ということも必要であろう。本学文学部においても，単位僅少者への個別面接や欠席が連続した学生がいた場合，教務課へ報告することなどによって個別対応を行っている。文献10で明らかにされたように不適応感はGPAに影響を与えていることを考えれば，単位僅少者だけでなくGPAが低い者への個別面接を行うことも考えられる。こうした面接では単位の取得に関する話題だけではなく，大学生活や将来展望など学生自身に関する話題も行うことで，大学への不適応感を探り必要に応じて学生相談室などへつなぐことも重要だと考えられる。例えば，先に挙げた東京未来大学での取り組みでは，キャンパスアドバイザーという職員が入学から卒業までの学生サポートを一貫して行っている（吉田，2017）。このサポートでは，学生の相談や対応を行った場合，学生一人一人のカルテを作り，引き継いでいるという。

当然，文部科学省（2014）の調査で明らかになったように，経済的事情も学生生活に与える影響が大きいことから，個別対応を行うにあたっては注意をは

らう必要もある。

このように考えていけば，学生個人個人の状況の把握，アセスメントが大切になると考えられる。こうした学生個人への対応について，入学目的や，入学前の期待と入学後の「帰属意識」「対人関係」「学業」への思いについて，アセスメントを継続的に行うことで，大学への不適応感を強めている学生を見出すことができるだろう。そして，その学生に対応することができれば，不適応感が強まった結果から大学への不登校や中退ということを予防できると予想する。もちろん不適応感が強まった結果，進路変更を学生自身が検討，新しい進路に進むための中退ということであれば，中退にも意味があるだろう。とはいえ，こうした進路変更にあたっても，大学教員または職員が密にかかわることができれば，進路変更における学生の熟慮を捉しうる。

以上，今回の文献研究から学生支援に向けた考察を行った。次に本研究での限界と今後に向けた展開を検討する。

本稿では，適応をキーワードとして文献研究というこれまで得られた知見をもとに中退の心理的要因と学生とりわけ新入生に対する支援について検討した。大学生活や日常生活への不満やうまくいかなさを不適応感ととらえたとき，その要因には「帰属意識」「対人関係」「学業」への思いが影響を与えていることが示唆された。今後に向けて，こうして考えられた事項に関する質問紙を作成，調査を実施し先行研究との比較を行うことで，今回示唆された事項をより明らかにすることができると考えられる。加えて，先行研究で扱っていたGPAや出席率などを取り扱うとするならば，倫理的配慮のためにも学内の倫理委員会による審査を受けることも求められる。

また，「帰属意識」を高める可能性として本学文学部での宿泊を伴う研修や，「対人関係」を高める可能性としての初年次ゼミ教育のあり方について考察を行った。これは文献研究を通して考えられたことであり実証はされていないため，さらなる先行研究の探索と，上記のように作成した質問紙をもとにした調査を通して明らかにする必要がある。

以上のように本稿では，大学を中退する心理的要因について検討するために，「適応」をキーワードとして，過去10年間の文献研究から明らかにされた知見の整理と検討を行った。結果，学生の大学への不適応感には，「帰属意識」，「対人関係」，「学業」の要因が複雑に絡み合っていることが考えられ，これらを明らかにできるような質問紙の作成や実践研究を行うことで大学への不適応

感に軽減できる可能性が示唆された。

註　文献 4 の「大学生活（姿勢）」「大学生活（実際）」は，その質問項目にそれぞれ大学での学びに関するものと対人関係に関するものが含まれていた。それゆえ，本稿では，「対人関係に対する思いについて尋ねた質問・因子群」と「学業に対する思いについて尋ねた質問・因子群」の両方に分類した。

文献

千島雄太・水野雅之（2015）入学前の大学生活への期待と入学後の現実が大学適応に及ぼす影響：文系学部の新入生を対象として　教育心理学研究 63(3)，228-241

金子千香・平林茂・菅沼一男・堀本ゆかり・齋藤孝義（2017）理学療法学科新入生の抱える大学生活不安に関する2大学間の比較　理学療法科学 32(1)，85-88

金子千香・平林茂・菅沼一男・眞保実（2017）入学直後の大学生活不安に関する理学療法学科学生と非医療系学科学生との比較　理学療法科学 32(6)，769-772

松井洋・中村真・田中裕（2010）大学生の大学適応に関する研究　川村学園女子大学研究紀要 21(1)，121-133

松井洋・田中裕・中村真（2012）大学生の大学適応に関する研究(3) 川村学園女子大学研究紀要 23(1)，117-129

松髙由佳（2017）大学生の不登校に関する要因の検討　広島文教女子大学心理臨床研究（7)，1-8

文部科学省（2014）学生の中途退学や休学等の状況について（報道発表）http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/1352425.htm

中村真・松井洋・田中裕（2011）大学生の大学適応に関する研究(2)：入学目的,授業理解,友人関係でみた対象者のタイプと大学不適応との関連　川村学園女子大学研究紀要 22(1)，85-94

中村真・松田英子（2013）大学生の学校適応に影響する要因の検討：大学不適応,大学満足,就学意欲に着目して　江戸川大学紀要（23)，151-160

中村真・松田英子（2014）大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響 ： 帰属意識の媒介効果における性差および適応感を高める友人関係機能　江戸川大学紀要（24)，13-19

中村真・松田英子（2015）大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響(2)：出席率,GPA を用いた分析江戸川大学紀要(25)，135-144

中村真・松田英子・薊理津子（2016）大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響(3)：帰属意識に基づいて分類した大学生のタイプと大学不適応との関連　江戸川大学紀要（26)，23-31

西田斉二・田丸佳希・宮嶋愛弓・杉原勝美・川上永子・松下太・銀山章代・上田任克（2014）リハビリテーション医療系大学生における学業および大学生活適応尺度の作成　四條畷学園大学リハビリテーション学部紀要10，25-29

野波侑里・近藤伸彦・玉本拓郎（2011）初年次生の大学生活への適応に関する調査

報告(1) 大手前大学論集 12，227-243
坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮・川上正浩（2018）大学生活充実度と大学へのリテンションとの関連：SoULS-21を用いた縦断的研究　大阪樟蔭女子大学研究紀要 8，39-46
杉本和弘（2017）学生情報の共有と手厚い初年次教育で育む学生支援の輪　リクルート　カレッジマネジメント 202，22-25
吉田文（2017）徹底した個別サポートで学生の主体性を育てる　リクルート　カレッジマネジメント 202，26-29

キーワード　大学生　中途退学　文献研究